叢書

よこすかきょうどしりょうそうしょ

#53

横須賀郷土資料叢書

よこすかきょうどしりょうふっこくかんこうかい

作者:横須賀郷土資料復刻刊行会

成立:昭和53-57(1978-1982)

叢書解題

横須賀市の郷土史研究に資する近代資料の覆刻を企図して、横須賀郷土資料復刻刊行会から刊行された。当初は全10輯の予定だったが、「資料誌としてふさわしい五十年以前の刊行物は概ね発刊した」として第９輯で繰上げ完結となった。各輯１函に原本の複製と解説書を収める。

構成及び各巻解題 [K08.31/1]

第１輯 『神奈川県地誌略』『横須賀案内記』

『神奈川県地誌略』は明治15年4月に発行された。明治10年代中頃の神奈川県内の全般的事情、また三浦郡が同県の中に占める位置を知るという点で好資料と考えられる。編輯人奈流芳誠一については生没年等不明である。

『横須賀案内記』は横須賀開港50年を記念して、横須賀市が編纂、横須賀開港五十年祝賀会が大正４年９月に発行した。地方公共団体の編纂・発行による案内記は初めてのものであり、名所･旧蹟にとどまらず横須賀が広く紹介されていること、多数の写真が使われていること、全体の約３分の１が広告で占められていることなどが特徴となっている。

第２輯 『浦賀案内』『浦賀町郷土誌』 『武相名所杖』『みうらの名所』

『浦賀案内』は明治40年４月発行で、旧浦賀町の商工案内及び商店名鑑というべきものである。編集兼発行人の小川鎌太郎は浦賀町谷戸の薬店の主人で、薬剤師でもあった。慶応３年（1867）に江戸に生まれ、昭和11年没。

『浦賀町郷土誌』は、奥付がなく編著者･発行者･発行日等不明であるが、明治45年発行と推定される。総論のほか、郷土誌が浦賀･大津･鴨居･走水の地域別に記述されており、内容も多岐にわたって豊富である。

『武相名所杖』は、明治17年７月発行の武蔵国と相模国の名所案内である。別書名として「一名 江ノ島 鎌倉 金沢 横須賀 独案内」とある。紙数の約半分が横須賀に費やされ、その約80％は横須賀造船所の案内である。

『みうらの名所』は、明治30年９月発行で鎌倉･金沢以南の三浦半島の名所案内である。著者は福良虎雄となっているが、生没年等は不明である。名所･旧蹟のほかに著者が自分の足で歩いて書いた横須賀町･浦賀町･三崎町の

様子が紹介されており、通常の名所案内以上の内容となっている。

第３輯 『浦郷村郷土誌』『田浦町誌』

『浦郷村郷土誌』には奥付がないが、本書を所蔵する東大史料編纂所の目録によると発行者は浦郷村役場、明治44年の発行となっている。浦郷村は、明治21年４月１日、浦郷村･船越新田･田浦村･長浦村が合併して生まれたもので、大正３年５月に田浦町と改称された。

『田浦町誌』は、三浦郡教育会第一部会により御大典奉祝記念事業の一つとして昭和３年に発行された。田浦町は昭和８年、横須賀市に編入された。

第４輯 『横須賀海軍工廠沿革誌（正）』『横須賀海軍工廠沿革誌（続）』『横廠工友会沿革史』『浦賀船渠工愛会十年史』『遠武秀行君伝』

『横須賀海軍工廠沿革誌（正）元治元年～昭和２年』及び『横須賀海軍工廠沿革誌（続）昭和３年～昭和７年』はともに奥付がなく、発行者･発行年月が不明であるが、横須賀海軍工廠当局の作成とみられる編年体の記録。

『横廠工友会沿革史』は、昭和13年５月に発行された。発行者は工友会。工廠に働く労働者の生活状態、労働条件の維持改善･向上の歴史を記述。

『浦賀船渠工愛会十年史』は、月刊雑誌『社会運動往来』に昭和７年から８年まで都合５回連載されたものの覆刻である。著者･三浦鉄吉の経歴等は不明である。

『遠武秀行君伝』は、明治30年に発行された『実業人傑伝』第３巻に収録された文章の覆刻である。遠武秀行は、明治８年から明治22年にかけて横須賀造船所に在職していた人物で、長官･所長を４年６か月務めた。

第５輯 『長井町々勢要覧』『大楠町々勢要覧』『三浦郡長井村勢一班』『神奈川県三浦郡勢一班』『三浦大観』『相陽民報』『横須賀』

『長井町々勢要覧（昭和９年版）』は、昭和９年12月、長井町役場から発行された。内容は、沿革及び統計（面積･現在人口･職業別戸数と人口･教育･財政･産業･各種議員有権者数等）から成る。

『大楠町々勢要覧（昭和10年版）』は、昭和10年７月に発行された。町制施行の記念事業の一つとして実行されたものと推測される。内容は主として沿革と統計だが、このほかに地域別の名所旧跡が説明されている。

『三浦郡長井村勢一班（大正12年）』は、同年長井村から発行された。

『神奈川県三浦郡勢一班（大正４年）』は、同年三浦郡役所から発行された。

『三浦大観』は、明治39年９月逗子の松林堂支店を発売元として発行された。著者の佐藤善治郎は、明治３年５月千葉県君津に生まれ、発行当時は神奈川県師範学校の教諭をしていた。構成は三浦の大観、地理、案内(西海岸)、案内(東海岸)、歴史及び附録から成っている。

『相陽民報』は、『横須賀新報』の後続紙で、覆刻したのは完全本ではないが、明治22年９月発行の第２号である。

『横須賀』は、横須賀町大滝23番地の三浦社の発行で、編集人弘喜久雄、発行兼印刷人夏目栄元となっているが、発行の経緯は不明である。覆刻は明

治30年４月発行の第９号である。

第６輯　『三浦郡地誌』『三浦郡生徒用史談』『横須賀町・三浦郡・神奈川県地誌史談』『横須賀研究　附三浦半島誌』

『三浦郡地誌』は、三浦郡教育会が郡内の小学校生徒用に編集した郷土に関する地理の副読本で、明治24年２月に刊行された。

『三浦郡生徒用史談』も、小学校高等科第１学年の歴史科用の補助教材として、明治28年３月に三浦郡教育会が編集･刊行した。

『横須賀町・三浦郡・神奈川県地誌史談』は、三浦郡教育会考案として明治32年４月に刊行されており、編集兼発行人は竹川新四郎となっている。竹川新四郎は、天保６年（1835）大津村井田に生まれ、明治７年横須賀村汐留で書店･小川堂を開業し、後に印刷業も営んだ。明治41年６月没。

『横須賀研究　附三浦半島誌』は、大正６年８月横須賀市旭町の一二三堂書店から刊行された。著者の綾部虎治郎は、明治７年４月静岡県元吉原村で生まれ、大正２年１月神奈川県立第四中学校教諭として横須賀に来住、同10年10月までを過ごし、昭和13年１月埼玉県川越市で没した。大正12年の震災前の横須賀を知る有力な資料である。

第７輯　『横須賀震災誌 附復興誌』

昭和７年５月、横須賀市震災誌刊行会から刊行され、発売所は横須賀日日新聞社となっている。第１編災害、第２編救護で構成され、復興誌を付す。

第８輯　『横須賀港独案内』『横須賀案内記』『現代の横須賀』

『横須賀港独案内』は、明治21年３月、武内馬渓によって編纂･発行された横須賀のガイドフックである。本名は武内一郎、馬渓は号であるが、経歴の詳しいことは不明である。

『横須賀案内記』は、伴田滔洋･股野東洋共編で、明治41年７月初版、43年７月に再版が軍港堂から刊行された。伴田滔洋については経歴等不明である。股野東洋は、軍港堂の店主で本名は三蔵、東洋は号である。嘉永６年（1853）越後国新発田に生まれ、明治24年海軍を除隊後、軍港堂を開業した。大正５年６月没。

『現代の横須賀』は、大正４年９月、横須賀開港50周年記念として永田是治によって編集･発行された。執筆者は平松華城であるが、『横浜日報』の記者だったことがあるという以外、経歴等不明である。第１集（総説、50年前、前後の変遷）第２集（軍事、現代）第３集（現代）の３編で構成されている。

第９輯　『第１回横須賀市統計書』

本書は、大正４年９月に横須賀市役所から刊行された。横須賀に関する基本的事実や出来事を集計して、相互の関係を明らかにし、また比較対象をした最初の統計書である。扱っている期間は、市制施行の明治40年から大正２年までの７年間で、市政初期の横須賀を数量的に記録した貴重な資料である。